

短 報

学生の抱く作業療法士の理想像

—— 入学前後の変化 ——

井上桂子 東嶋美佐子 日比野慶子

川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科

(平成9年5月21日受理)

The Ideal Image of the Occupational Therapist held by Students

—— A Comparison Before and After Admission ——

Keiko INOUE, Misako HIGASHIJIMA and Keiko HIBINO

*Department of Restorative Science
Faculty of Medical Professions
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted May 21, 1997)*

Key words : occupational therapist, occupational therapy education,
ideal image

はじめに

入学後、量、質ともに膨大な知識・技術の学習に圧倒される学生が多い現実から、入学後の作業療法教育を効果的に進めるためには、学生になぜ今、この学習が必要なのかという目的意識を明確に持たせることが重要であると考え、そのためには、学生自身に、より早期から、より適切な作業療法士像を持たせ、それに向かっての努力が続くように援助することが教員の一つの重要な役割であると考え、

作業療法は、障害をもつ人を対象に、専門的な知識・技術を背景にして、対象者を援助する職業である。上田¹⁾は、専門職の倫理を「真の治療効果を論理的・科学的に追及する姿勢が専門職に要求される最低限の職業倫理である」と述

べている。また、高松²⁾は、作業療法教育への注文として、「どんな作業療法士を素晴らしいと思うか」という観点から①人間としての能力②組織人としての能力③専門知識や技術の能力の3領域を挙げている。このように、作業療法士には、専門的な知識・技術が備わっていることは最低限のこととして、人を対象にする職業であるため、道徳的・倫理的な面や対象者および対象者を取り巻く他の職種との人間関係などの態度が良好であることが要求される。そして、この知識・技術と態度(人間性)の両面は、1人の作業療法士にバランスよく備わっていること、さらに、その両面がより高い水準であることが望ましい。

今回、我々は、作業療法士になることを目指して入学してきた学生がどのような作業療法士

の理想像を抱いているか、さらにその理想像が教育によってどう変わっていくかを調査した。

対象と方法

対象は、以下の3条件を満たす川崎医療福祉大学リハビリテーション学科作業療法専攻の学生20名（男性6名、女性14名、年齢18～34歳、平均年齢19.8歳±4.3歳）とした。

①平成8年2月実施の一般入試を受験し、小論文（設題「あなたが障害を持つ人になったと仮定して、どのような作業療法士に担当して欲しいですか。あなたが必要とする作業療法士像を書いてください。」）に解答した。

②平成8年7月実施の作業療法学総論Ⅰの試験を受け、設題「あなたが障害を持つ人になったと仮定して、どのような作業療法士に担当して欲しいですか。あなたが必要とする作業療法士像を書いてください。」に解答した。

③平成9年2月実施の作業療法研究Ⅰの試験を受け、設題「あなたの理想とする作業療法士像を書いてください。」に解答した。

以下、上記①を「入学前の調査」、②を「入学3カ月後の調査」、③を「入学10カ月後の調査」とする。①②③の記載内容から、対象者が理想とする作業療法士像を説明するために使用していた用語・語句を抽出した。なお、①②③の調

査の時期と対象者が受けた専門科目名を表1に、作業療法研究Ⅰの授業概要を表2に示した。

結 果

1. 使用していた用語・語句

抽出した用語・語句を、『知識・技術に関すること』『態度に関すること』に分類した。それぞれに分類した用語・語句を調査の時期別に表3に示した。入学前の調査では、知識・技術に関

表1 調査時期と専門科目

平成8年2月	入学前の調査
4～7月	解剖学Ⅰ 生理学Ⅰ リハビリテーション総論 作業療法学総論Ⅰ 基礎作業学実習Ⅰ
7月	入学3カ月後の調査
8月	(病院・施設見学*)
9～2月	解剖学Ⅱ 生理学Ⅱ 生理学実習 人間発達学 理学療法学総論 作業療法研究Ⅰ
平成9年2月	入学10カ月後の調査

*：自主性を重視し強制はしなかったが、教員は意義を説明して見学を勧めた。
対象者のうち19名は1人1～4（平均2.4）箇所を見学した。

表2 「作業療法研究Ⅰ」の概要

目 標	・作業療法の臨床見学により学習・研究の動機づけとする。 ・疑問解決の出発点として文献研究を行う。 ・グループ作業、発表、質疑応答を体験する。
内 容	1 説明 2 臨床見学1回目→感想レポート提出 3 臨床見学についての討論・発表 テーマ1「作業療法士に必要なことは？」 テーマ2「臨床見学で何を学ぶか？」 4 発表のまとめ 5・6 臨床見学2回目 7 グループでレポート作成（見学を基にグループでテーマを設定し文献研究） 8・9 文献研究発表 10・11 臨床見学3回目 12 グループでレポート作成 13・14 文献研究発表 15 まとめ

する用語は合計22個、態度に関する用語は合計32個で、態度に関する用語・語句の方が多かった。入学3カ月後は、知識・技術に関する用語は合計39個、態度に関する用語は合計27個で、知識・技術に関する用語が増加した。入学10カ月後は、知識・技術に関する用語は合計29個、態度に関する用語は合計73個で、態度に関する用語が著しく増加した。

用語の内容は、知識・技術に関することでは、入学後は「確実な（きちんとした）知識・技

術がある」ことを書く者が多く、これは入学後3カ月、10カ月ともに同様であった。態度に関する用語の内容は、入学前と入学3カ月後は大きな変化はないが、入学10カ月後は「多職種と協力する」「学習欲・研究心を持つ」「テキパキ・きびきびした態度」などそれまでなかった用語・語句が多種類にわたって書かれていた。

2.『知識・技術に関すること』『態度に関すること』を記載した学生数とその変化
記載内容が、知識・技術に関することのみか、

表3 理想とする作業療法士像を説明するために学生が使用していた用語・語句

() 内の数字は件数

	入 学 前	入 学 3 カ 月 後	入 学 10 カ 月 後
知 識 ・ 技 術 に 関 する こと	適切な治療ができる(3) 技術がある 工夫した治療ができる(2) 楽しい治療ができる 新しい治療を考える ニーズに答える 能力を最大に引き出す(3) 社会復帰への援助をする(4) 精神面のケアをする(2) 新たな目標に向かわせる 生きる力を与える 予後予測できる(2) (合計22)	確実な（高水準の）知識・技術がある(14) 適切な評価・治療ができる(5) 早く改善できる 臨床経験豊かな(2) 対象者が興味・関心ある作業を用いる(5) 能力を最大に引き出す(3) 社会復帰への援助をする(2) 生きがい獲得への援助をする 自信獲得への援助をする(3) がんばれる方向へ気持を向ける 治療計画・目標を示す 今後の生活状況を示す (合計39)	確実な知識・技術がある(15) 豊富な知識がある(3) 最新の知識がある 適切な治療ができる 工夫した治療ができる 種々の治療ができる 興味に応じた治療ができる 能力を最大に引き出せる ニーズに答える 満足感を与える 利益を与える 対象者の趣味を増やす 生きがい発見の援助をする (合計29)
態 度 に 関 する こと	温かい(3) 楽しい やさしい 熱心な あきらめない 長い目でみる 回復を心から願う 励ます(2) やる気を出させる 孤独にしない 共に喜び悲しむ 十分に話を聞く(2) 思いを理解する(2) 心の支えになる(4) 対象者の立場で考える(2) 差別しない 劣等感を持たせない 対象者を尊敬する 対象者の意志を尊重する 信頼される(4) (合計32)	明るい(3) 楽しい(2) やさしい まじめな 健康な 生き生きした しんどくても表に出さない 全力を注ぐ あきらめない 長い目で見る(2) 励ます 十分に話を聞く 思いを理解する(3) 思いやりある(2) 対象者の立場で考える(3) 秘密を守る 信頼される(2) (合計27)	明るい(5) 楽しい(2) 笑顔を絶やさない 人なつっこい(2) 人をなごませる 健康な(3) 包容力ある 不快感を与えない ポジティブ思考 個性的な かわいさのある 好かれる 性格のよい 熱心な 粘り強い(2) 誠意のある 責任感ある 時間を守る 精神的に強い(2) おごらない 思いやりのある(3) 思いを理解する(4) 話しかけやすい(2) コミュニケーションを大切にする きちんと説明する(2) 対象者の意志を尊重する 信頼される(7) 他職種と協力する(5) 他職種を尊敬する 協調性のある 教養のある 学習欲・研究心のある(4) アイデア豊富な 思考が柔軟な 種々なことに興味をもつ(2) 倫理規定を守る(2) 専門職としての自覚をもつ 自分を誇れる テキパキ・きびきびした(3) (合計73)

態度に関することのみか、知識・技術と態度の両面に関するところか、で分類したところ、入学前には、知識・技術と態度の両面に関することを書いた者が11名、知識・技術に関することのみを書いた者が1名、態度に関することのみを書いた者が8名いた。入学3カ月後には、知識・技術と態度の両面を書いた者が14名、知識・技術のみを書いた者は6名になった。入学10カ月後には、知識・技術と態度の両面を書いた者が18名、知識・技術のみを書いた者が1名、態度のみを書いた者が1名になった。

学生個々の調査時期による変化を表4に示した。時期によって変化した者は13名（全対象者の65%）、時期により変化しなかった者は7名であった。これらの7名はすでに入学前から知識・技術と態度の両面に関することを記載していた。

考 察

入学前は、知識・技術に関する用語・語句の記載のない者が8名（全対象者の40%）いたが、入学3カ月後には、全対象者が知識・技術に関する用語・語句を記載していた。また、知識・技術に関する用語・語句の数も増加した。しかし逆に、態度に関する用語・語句の記載のない者は入学前には1名のみであったが、入学3カ月後には6名になった。これは、入学後4～7月に履修した専門科目の影響であろうと考える。これらの講義を担当した教員の多くは、講義中に直接、作業療法士にとって確実なしかも高水準の知識・技術を身につけることの重要性を強

調した。これらの教員の言葉と単位履修に要求される知識の量と質を体験した結果、学生は知識・技術を備えることの重要さに気づき、「どんなによい態度に接しても、それだけでは障害を持つ人に対する専門職としての援助はできない」という認識を持ったと考える。この時期に、態度に関する用語・語句の記載のない者が多くなったのは、あまりにこの認識に目が向き過ぎたためと考える。

入学10カ月後の調査では、知識・技術に関する用語・語句の記載のない者、態度に関する用語・語句の記載のない者がそれぞれ1名いた。知識・技術と態度の両面に関する用語・語句を記載した者は18名（全対象者の90%）で、用語・語句の数では、態度に関するものが著しく増加した。知識や技術が身につけていることの重要さの認識は持続していたと考える。態度に関する用語・語句を記載した者の増加および記載語句の総数や種類の増加は、夏季休暇中に行った病院や施設での作業療法の臨床見学、作業療法研究Ⅰ（9～2月実施、授業概要は表2）で行った作業療法の臨床見学や見学後の討論会・勉強会が影響したと考える。特に、作業療法士が患者に接する姿を実際に見た体験の影響が大きいと考える。鈴木や矢谷³⁾は、知識・技術に関するペーパーテストはよくできる学生が自我の弱さや精神的脆さで臨床実習でつまずくことがあることから作業療法教育における人間教育の難しさを述べ、津山³⁾は患者にできるだけ多く接することが人間教育にとって大切と述べている。

表4 個々の学生における記載内容の変化
A～Tは個々の学生を示す

	入 学 前	入 学 3 カ 月 後	入 学 10 カ 月 後
知識・技術に関することのみを記載した者	A (1名)	B C D J K L (6名)	B (1名)
態度に関することのみを記載した者	B C D E F G H I (8名)		M (1名)
知識・技術と態度の両面に関することを記載した者	J K L M N O P Q R S T (11名)	A E F G H I M N O P Q R S T (14名)	A C D E F G H I J K L N O P Q R S T (18名)

入学10カ月後までの今回の調査では、学生の抱く作業療法士理想像は、調査時期により変化した者が多かった。これは、入学後早期の学生の意識は、教育内容・方法によって影響されやすいことを示唆する。教育内容や方法は慎重に計画・実施しなければならない。今後も、入学後の作業療法教育を効果的に行うための方策を考え続けたい。

また、今回は、入学後10カ月までの経過を追ったに過ぎず、対象学生はまだ作業療法の臨床

経験はない。今後の授業や臨床実習によって、現在抱いている作業療法士理想像がどのように変化していくのかの検討も続けたい。

稿を終えるにあたり、理学療法士・作業療法士教育に情熱をそそぎ続け、平成9年2月18日に急逝された故川崎医療福祉大学医療技術学部リハビリテーション学科教授古米幸好先生に本稿を捧げ、ご冥福をお祈りいたします。

文 献

- 1) 上田 敏(1983) リハビリテーションを考える。青木書店, pp282—310.
- 2) 高松鶴吉(1989) 作業療法教育への注文。作業療法ジャーナル, **23**, 649.
- 3) 五味重春, 津山直一, 鈴木明子, 矢谷令子, 寺山久美子(1991) 作業療法の過去・現在・未来。作業療法ジャーナル, **25**, 870—879.